

新型コロナウイルスが生み出した新しい社会秩序の中で、
私たちはなにに取り組んでいくべきなのでしょう。

高梨直紘（東京大学）／平松正顕（国立天文台）

やわらかな春の日差しを感じる昼下がり。開け放った窓からは、風に乗って近所のさざめきが聞こえてきます。その遠くで、防災無線が今日も緊急事態宣言発令下であることを告げる。そんな日常にも、なんとなく慣れて来てしまいました。

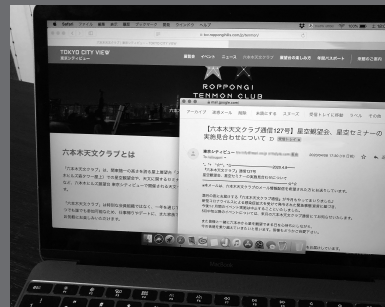
思い出すのは2011年のこと。あの時も春でした。東京に住む私たちは、地震や津波の被害を直接は受けなかったものの、引き続いて起きた電力不足などの社会的混乱にはもちろん巻き込まれ、今と同じように、ぼんやりとした不安の中で過ごしていたことを思い出します。

このような厳しい状況は、私たちに与った試金石でもあります。私たちはどのような価値を、社会に提供できるのか。いや、そんな大上段に構えなくともいいでしょう。私たちの身の回りにいる人たちに向けて、いったいなにができるのか。シンプルにその事が問われているのだと思います。天文コミュニティを見渡して

みれば、どこも厳しい状況にはあるものの、すでにさまざまな情報発信や活動をはじめた人やグループもあり、心強く感じます。

2011年の時には、私たちも自分たちの得意とすることを活かして、被災地での天体観望会やワークショップ、支援者のネットワーク作りや研究会の開催などに取り組みました。では今回も…というわけにいかないのが、新型コロナウイルスの難しいところ。家に居ることや、人と密に接してはならないこと。こういった条件を守りつつとなると、宇宙をネタとした対話的活動を中心に行ってきた私たちにとっては、なかなか難しい。なにか新しいチャレンジをすることが必要となります。もっとも、こういう時に身軽に動けるのが天プラの強み。私たちならではのユニークな活動のあり方を探っていきたいと思います。

それにしても、今の段階ではこのよう



六本木天文クラブももちろん活動休止中。

な状況がいつまで続くかわかりません。長期化することも十分考えられるでしょう。したがって、私たちの方が変化してこの状況に合わせていかねばなりません。言い換えれば、新しい日常に作り変えていく必要があります。与えられた課題には前例が少ないものの、解けない問題でもなさそうです。1年後には、さまざまな知恵と努力によって、新しいライフスタイルが出来上がっていることでしょう。そこに、天文コミュニティとしても多くの貢献が出来ていることを願っています。